には野草や木の芽、また、栗茸に似たキノコがあり、これ等を採って腹の足しにした。ここの近くのコルホーズのジャガイモ畑で、掘り残しのイモを拾ってきたりすることもできた。

昭和二十二年の夏頃より、体の弱い者から東京ダモイといって出ていくようになる。我々の順番はなかなか回ってこない。何人か集まれば、懐かしい故郷の話、ことに郷土料理の話に花を咲かせ、故郷をしのんで耐えるしかなかった。

やがて民主教育が始まり、民主化しない者は日本には帰さないと言われる。作業終了後、アクチーブといわれる連中が来て民主化を説く。その果てには、偉大なるスターリン閣下に感謝状を送る話まで出る。心ならずも日本へ帰るためには賛同せざるを得なかった。

四年目の夏が近づく頃、ようやく帰国の時が来る。つらく長かったタイセットでの収容所生活に別れを告げ、列車でナホトカへ。ここで船を待つこと二十日余、迎えの引揚船に乗り舞鶴へ着いたのは、昭和二十四年八月二十四日。待望の帰国の夢をようやくかなえることができた。

帰郷後しばらくして、同年十月より国鉄復職もかない、定年まで勤務することができた。

抑留生活を顧みて

長野県　金　原　　正

大正十二（一九二三）年四月二十日、長野県諏訪郡川岸村に生まれる。

昭和十四（一九三九）年三月、村立川岸小学校高等科卒業。四月十七日、満蒙開拓青少年義勇軍内原訓練所入所。

同年六月二十七日、満州国三江省勃利県勃利義勇隊訓練所入所。

昭和十五年十一月、牡丹江省綏陽県老菜営義勇隊訓練所入所。

昭和十七年十月三日、北安省通北県鶏走河第二次曙義勇隊開拓団に入植す。

昭和二十年七月二十日、臨時召集により嫩江の独立混成旅団に入隊。部隊北方の陣地構築に当たる。八月九日、ソ連参戦。八月十三日、全員陣地を引き揚げ、隊に戻る。

八月十四日、突然、ハルビンに移動し最後の決戦を行うと言われ、各人一〇キロ箱爆雷を渡され列車に乗る。列車はなかなか発車せず、夜中にようやく発車。十五日昼を過ぎた頃、途中の駅に停車した時、鉄道警護隊員の人から日本は戦争に負けたらしいと聞き、列車内は騒然となる。夕方、列車はチチハルの駅に着く。

駅近くの空兵舎に入り、ここで戦争の終結を聞く。翌日、貨物廠へ移動せよの指示で貨物廠に行くと、既にソ連軍に接収され、兵器廠へ移動し、ここで帰国を待つこととなる。

それから一カ月近く過ぎた九月十四日、臨時作業隊を編成して出発する。全員準備を整えて集合せよの命令、いよいよ日本へ帰れると喜び集合する。

部隊は、熊谷大隊と當山大隊を合わせ一五〇〇人の大隊編成、各中隊ごと四列縦隊に並ぶ。ソ連軍の将校が来て点検が始まる。ところが四列では数えることができない。「五列に並べ」とは驚きであった。点検も終わり自動小銃を持ったソ連兵に囲まれ、大陸の秋の夕陽が西に傾くころチチハルの街を行進していると、道の両側から「兵隊さーん、兵隊さーん」と声を限りに叫ぶ声が聞こえる。開拓団等から避難して来た婦女子であろうか。妻子を置いて来た私達にしてみれば、やりきれない思いでいっぱいであった。

一晩中歩き、夜明けに楡樹屯に着く。ここで列車に乗る。貨車の両側に板で三段にしてあり、座れば頭がつかえる。九月十五日夕方、ハイラル方面に向かって発車する。誰言うとなく、ハイラル、満洲里あたりの戦跡の整理作業をして日本へ帰るとの話を信じていたが、翌日ハイラルを過ぎ、満洲里の国境を過ぎても大陸の大草原を西へ西へと走り続ける。食事もろくになく、全く窮屈この上なし。

やがてバイカル湖を過ぎ、楡樹屯を出て十二日、クラスノヤルスクの手前、小さな駅に着く。ここから程

近いクラスノヤルスク第三収容所に入る。
草原の中、高い板塀、その上を鉄条網を張り巡らし、四隅に高い望楼、その中に粗末なバラックが何棟か建っている。中に入れば、来る時の列車と同様、三段に板張りの床、これが一棟に三列ある。この床に毛布を一枚敷き、三人で二枚の毛布を掛けて寝る。夜ともなればノミ、シラミ、南京虫に悩まされ、安眠もできない。食事はコウリャンかアワの粥が少量、いつも空腹に耐えている。
作業は住宅の基礎の穴掘り。凍てついていてスコップやツルハシでは歯が立たない。鉄の矢を鉄ハンマーで打ち込んでかいて掘る。一日一人一メートルのノルマを達成しろと言われても十分の一もできない。
年明け頃より栄養失調による死亡者が続出する。三月頃になり身体検査があり、ソ連の女医が尻をつまんで、一級、二級、三級と区分していく。一級は労働、二級は軽作業、三級は休養となる。
この頃よりエンバクの粥が出るようになり、少しは良くなった。何としても日本に帰るまではとお互いに助け合い励まし合って頑張るしかなかった。
昭和二十二年頃より民主教育が始まる。作業を終え宿舎に帰るとアクチーブと呼ばれる人達が来て、『日本新聞』をテキストに教育である。民主教育ができていない者は日本へ帰さないと言われ、表向きは同調しなければならなかった。
昭和二十三年七月に第一棟が帰国、続いて我々第二棟も八月にクラスノヤルスクを発ってナホトカへ。復員船に乗り舞鶴へ着いたのは九月上旬。各種手続きを済ませて我が家へ帰る。家族と再会し初めて、夢でなく本当に帰ったんだなあと実感がわく。
昭和二十五年六月に株式会社林紙器へ入社。昭和四十九年、取締役工場長に就任。平成六年二月二十八日、監査役に就任。平成八年六月八日、無事に退職することができた。